
狩人物語

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人物語

【Zコード】

N6478Y

【作者名】

黒崎しのぶ

【あらすじ】

イケメンで最強な主人公がHUNTERの世界にトリップ!
ネテロの弟子で、紅い閃光と呼ばれる少女ユキノ。

原作を書き回しながら、悪い奴らをフルボッコにしちゃうお話。
オリキャラ多数!只今四次試験中。

蒼迅ユキノ（あおはやゆきの）

女。16歳。162cm 43kg

激しく差別されていた一族の長の娘。
兄コウヤと共に、奉公に出される。

そのほかは、いずれ本編で明らかになります。

甘いもの大好き。かわいいものも好き。
幽霊、妖怪といったものが大の苦手。
感情をあまり表に出さない。

嫌いな人間にはとことん冷たく、好意を抱いている人間
には、とことん優しい。ブラコン。
人殺しはしない。

9:1の割合で男に間違えられる。
しかし、本人はそれにすら気付かないほど鈍い。
自分の見た目には疎い。

赤髪金目。細身で手と足が長い。主になぎなたなど、剣系の武器を
使う。（基本は素手）
胸あたりまでに延ばした髪は、後ろで低い位置にひとつとくつ
いる。

首には、蒼い滴型のペンダントをつけている。

通り名・あだ名

紅い閃光

紅い貴公子

レッド・デビル

etc.

ユキ ゆきりん

ユキパー

おつまみ

e

念 特質系

全系統、100%引き出せぬ。

能力は、そのうち一すみません・・・たぶん知っている技なら繰り出せる

みたいな感じになると感じます。

「のほかには、オリキャラ設定など、載せていく予定です。

慌てて作つたので、誤字脱字があるかもです・・・。

「ユキ……」

悲しそうな顔をしながら、俺を見つめる兄さん。

「何でお前が……こんなこと……」

俺の手を握り、兄さんは泣き出しちゃった。

兄さん……

「『1』めんなさい……俺には『ねぐら』しかできなーけど……」

はつとしたよつた顔を上げる。

「ユキノ……お……やめり……」

俺の周りに風が起る。

だんだんと俺の体が下から消えていく。

「ユキ！ ユキ！ ……ユキノっ！」

顔の半分が消えた。

兄さんが必死で何か喋っているが、もう何も聞こえない。

「あつがとう……」

兄さん……

もう何も残らない。

「兄さん」

俺は生きてます。

元気にしてます。

だから心配しないでください。

俺は強くなりました。

ジンというハンターに拾つてもらつて

色々な人に会い、色々教えてもらいました。

今日はハンター試験です。

俺は内部試験官といつものをします。

兄さん。いつか会いに行きます。

次に会つたら、俺と戦つてください。

あの日のように、負けたりしません。

絶対に勝つて見せます。

だから、会いに行きます。

たとえ、違う世界でも。

その日まで、待っててください。

絶対に会いに行きますから - - - - -

試験開始まで もの

「ノリかよ」

ある定食屋を見上げながら俺は思わず呟く。
ネテ口師匠からもらつた地図ではここで間違いない。
でもなあ……『ハンター試験会場』。

本当にここのか。

いつまでも悩んでられないの、俺はドアを開ける。

「こりゃしゃーい

気前のよきやうな親父の声が聞こえた。

「」注文は?

俺は思わずニヤける。

「ステーキ定食」

びくり、と反応した。

そんな露骨に反応しかばダメだろ。

「焼き方は?」

「弱火でじつくつ

そう告げると、かわいい女の子が部屋(?)まで案内してくれた。
ウイーンと音がし、ゆっくりと動き出すヒレベーター。

少し、重力感覚が狂う。

「お、食つていいのかこれ」

用意してあつたのはおいしそうなステーキ達。
俺はフォークを突き刺し、大胆に噉みつく。
無我夢中でほうばつていたらチン、と音がし、止まる。

「ついたやつたか」

まだ途中だつたステーキを何とか口に詰め込み、
残つたステーキを名残惜しいと思いながらエレベーターを出る。

今年はいい人材がそろつてるとと思つんだよなあ。

何でわかるかつて？そりゃあ勘だ。

だつてはいつた時の空気が俺のときと大分違つし。

そういう俺のときつて、俺も含めて一人しか残らなかつたんだつけ。
確か、シャル・・・シャルナークといったかな。
ま、なんにせよ

「これからが楽しみだ」

試験開始まで もの

「ユキノさん」

「つはいつー？」

いきなり声をかけられ、俺は思わず情けない声を出す。
周囲の人間は振り返り何事かと俺らを見つめる。
なんだよこの羞恥プレイ。

「ユキノさん……大丈夫ですか？」

マーメンだった。いきなり声かけんなよ。

「じめん。間抜けな声でた」

マーメンは苦笑いをしながら、番号札を渡してくれた。

「109番……結構遅かつたな」

番号札を胸のあたりにつける。

まあ、しょうがない。その前に師匠に頼まれた（押しつけられた）仕事を

たくさんすませてきたのだから。軽く五力園は回った。

しかもあの狸爺……乗り物使つたら即爆破じやぞとか言いながら
念で爆破装置つけやがつて……！あ、もちろん徐念した。
俺の能力で！

なんか、イラついてきた 。

「おじ兄ちゃん、俺トンパつてこうんだがどみ、お近づきのじるしに乾杯しねえか？」

「うそくわ」

声出ひやつたけど、いいか。

でも、心なしかトンパがあおおろし始めた。
もしかして図星だつたり。

なんか不自然で怪しいな。

よし、鎌をかけてみるか。

「それつてホントに何も入つてねえの？なんか変なにおいすんだけ
ど」

もぢりん噉。むじり今、鼻詰まつてて何もにおいしないし。

「な、なんにもはじつてねえよつ、い、いいから飲んでみろよ」

あわてながら呟つトンパ。じこまづくつやあ、確實に入つてんな。
俺はトンパに追い打ちをかける。

「下剤入りジユースならいらぬーよ」

言い放つ俺に、トンパは、弾丸の「」とく逃げて行つた。

「 . . まさかほんとに入つていたとは」

俺の疑い深い性格、はじめて感謝したかもな。

「はあ . . . 眠い」

試験開始まで寝とい。

俺は近くの壁に寄りかかると、すべさま眠りに就いた。

一次試験。その一

- ! ?

俺はいきなりなつたベルに、驚き声にならない叫びをあげる。
びっくりした . . .

「これより試験を開始します」

あ、サトシさん。相変わらずお髪がダンディ。試験開始かあ。なんか緊張してきたな。

年つてとるもんじやねえな

サトツさんがしゃべり終わり、集団が移動する。

やつと、試験開始か。

「おつおんざの一みせかたにいかがやくーー」

俺はのんきに歌を口ずさみながら、走っていた。

一見ゆつたり走つてゐるように見えるが、

るな」と
言われた。

「ねえ、お兄さん…」

後ろから声がする。ゆるーと振り返つてみると、満面に笑みを浮かべた少年がいた。

「俺のこと?」

一応、女なんだけど。

「うん…俺、ゴン＝フリークス…お兄さんな前は…」

「へえ、ゴン君か。いいね、純情な子、好きだなあ。

「俺は、ゴキノだよ。気安くゴキつて呼んでくれ

「うん…よろしくゴキ！」

お互いで手を出し、握手をする。

…。

「ゴン。もしかして、」

「ん、なんか言つた?」

「いや、なんでもねえよ

」

怪訝そうに首をかしげたゴンだったが、何か思い出したよう俺の手を引っ張り、後ろに駆けだした。

足がもつれて、誰かの胸にダイブしてしまった。

「え、ひみ、ひみお?…！」

その誰かさんは、「うお」と言しながらも、受け止めてくれた。

「すいません・・・」

俺がその人から離れながら言つ。

「大丈夫? ユキ」

「うん、大丈夫・・・」

ゴンは俺がぶつかった男・・・正しくは、青年とおじさんに向かって俺のことを紹介する。

「クラピカ! レオリオ! 」つちはユキだよ!」

俺がちらり、と二人を見ると、すごい勢いでそらされた。
なんですか!..

「おいゴン! そいつはトンパが危険だつて言つてたじやねえか!」

一瞬、耳を疑う。

「トンパ・・・? 危険人物・・・?」

「ああ、言つていたぞ、ヒソカと同じような快楽殺人鬼だと!」

快楽殺人鬼だと・・・? 俺が?

「俺は快楽殺人鬼じゃねえし! まず人殺しなんて普通怖くてできね
ーだろ!」

「え・・・?」

「だつて、夜とか出てきそうじゃんか！取りつかれそうじゃんか！」

「何が、とはあえて言わない。嫌いなんだよ、そういう奴！」

「お前、それほんとか？」

レオリオが尋ねる。

「ああ、人を殺した事なんて一度も・・・」

「ない。言いかけたところで言葉を飲む。
殺しただろ・・・自分を。

「ええい！とにかく、俺は殺さねーの！あいつと一緒にすんな

ヒソカは嫌いだ。変態だから。

「そうだつたのか・・・すまなかつたな」

「いやいや、分かつてもらえればそれでいいんだ

友達が三人増えました。

一次試験。その一

誤解が解けてから、俺らはすっかり打ち解けた。

いや、ほんとによかつた。てか、トンパ。。。

今度脅し。。。げふんげふん。挨拶しに行かなくちゃねつ！

「おいコラガキ！それは反則じゃねえのか！」

レオリオが叫んだ。

これは有名なあのシーンじゃないか！

これは参加するに限るねつ

「なんで？」

キルアがきいた。

レオリオのこめかみあたりに「うすうす」と青筋が浮かぶ。

やつべえ、超うけるんですけど！

「これは持久力を試すテストなんだぞ！」

「でも、道具使っちゃいけないとは言ってないよ」

「ゴンがいった。

「一本取つたねゴン君」

俺がにやにやしながら「ううう」と、「ゴンもにくつ」と笑ってくれた。
やばい、超可愛い。

「ねえ、君名前なんていつの？」

俺が思い切つて尋ねてみた。

「俺はキルア。あんたは？」

答えてくれるとは . . . 地味に感動だ。

俺はエキノコギでいい世上のじぐヰルアーヴィング

モーレツとギルバは一瞬に話しかける。

卷之三

「ねえ(一年一回)

お、ここのやり取りは、

「せ、は俺も走ら」と

キルア、カツコよかつたな。

「おれんの前髪は？」

俺も入りました。

やつぱりレオリオは老け顔でした。

俺は今年で16。兄さんは、6歳

よつてレオリオは22よつ年上となるのだ（何キヤウ）！

こつまでもこじられてくるレオリオの肩に手を置く。

「レオリオ」

俺が同情の眼差しを向けると、レオリオは

「ユキ、分かっててくれるのか?」

そんなレオリオとは裏腹の言葉を俺は口にする。

「年齢偽証は立派な詐欺だよ?」

それから30分間、レオリオは口をきいてくれませんでした。

一次試験。その三

もう何時間走つたんだろう。

ぶつちやけペース遅くて疲れてきた。。

楽な試験だけど精神的にはつらいよな。

「はあ・・・・・」

「なあ ユキ大丈夫?」

「なんか疲れてるみたいなんだけど」

「気疲れとペースが遅くて逆に疲れた」

「あーそれわかるー」

「じゃあさ一一番前まで行こうぜ」

やつこつとポンとキルアはスピードを上げた。

もちろん俺も置いて行かれたくないのでペースを上げましたよ。

一人ぼっちは嫌いだ。

そして二つの間にか一番前にまで来ていた。

「階段とかめんどくさい」

「だな。しかしハンター試験って結構簡単かもな」

まあ今のところただ走つてただけだしな。

これだけで収かるなら楽なんだだけ。

この後色々面倒くさいんだよなー

本当やんなつちやー。

「ねえといひでキルアはなんでハンターになりたいの？」

「は？俺？・・・・別にハンターにならなくなんかないよ。ものすごく難関だつて言われてるから面倒そうだと思つただけさ。でも拍子抜けした。ぜーんぜんつまんねーし」

本当に思ひとす「こ子どもたちだよね。

ヒソカが氣に入つちやうのもわかる氣がしてきた。

あつ俺とあの変態を一緒にすんなよー。

ヒソカは嫌いだ、変態だから。（一回目）

「ゴンは？」

「俺はね、親父がハンターやってるから。親父みたいなハンターになるのが目標だよ」

「キルアとは違つてまともな理由だね」

「ユキ・・・それじゃまるで俺がまともじゃないみたいじゃねーか」

「まともな人は暇つぶしだなんていいません」

「あははは！」

ハンター試験を暇つぶしどか・・・

本當天才はちげーな

つーか爆笑のゴンかわい・・・

「で？ ユキは？」

「へ？ 俺？」

「そーだよ。ユキだけ言わねーとかずりーよ」

ひみつとふてくられるキルア

おこおいお姉さん暴走しそうだぜ

かわいすげだるいの子ども組

キャラ崩壊して胸キュンキュンしそうだ

「俺はライセンスあつたほうが色々と生活に便利だから・・・かな?
?」

「かな?つて・・・自分のことだらり~なんで疑問形なんだよ」

「いやぶつかけ俺もあんまつちやんとした理由ないかも」

「じゅあ人のこと言えなーじゅ ねーかー

「こやキルアよつはまともだとおもつよ

「んだとーーー!」

本当試験中のこすりへ和むの空間。

メインキャラに絡む気なかつたんだけどな。

なんかほつておけないし、何よつこの絡みが心地よい。

久々に孤独感を味合わずにいられるな。

そしてなんやかんややつてこぬつむに出口から光が差し込んだ

一次試験。その四

「うおう、眩しい」

暗かった地下から一変して、湿原へ。
外に出ると、太陽がさんさんと照らしていた。

「やつと地下から出られただぜ」

皆お疲れのようだ。
そりやあ、無理もねえな。原作知つてた俺でも結構つらかったんだ

から。

さつきから、ヒソカのねつとりとした視線がつらい。
前に、仕事で知りあつて目付けられたんだよなあ。

「嘘だ！そいつは嘘をついている！」

突如響いた声。

それは怪我だらけの男からだった。

なんか長つたらしく理屈こねてるけど、
矛盾しまくった。

それよかてめえ、俺のサトツさんにけち付けやがったな。
でも、偽物の言葉を信じてる奴もいた。

あ、レオリオ。

なんか笑ってきた。

俺は一生懸命こり出来るが、とうとう吹き出してしまつた。

「だはははははははー！な、なに言つてやがんだよーひやははははー！超受けんんですけどー矛盾しまくりだつーのー！」

だははと爆笑する俺を、冷たく見つめるキルア。

偽試験官は、顔を赤くして、目あわてていう。

「どうが矛盾しているというんだ。」

よつやく笑いがおさまってきた俺は、手を口に当て、説明を始める。

「よく考えてみろよ、人面猿つてのは、貧弱なんだろ？それなのにサトツさんは息も切れてないし汗もかいてない。猿には不可能つてわけだ」

周りから、そういうやそとかも、といった声が聞こえてきた。偽試験官の顔はだんだん青くなつてくる。

「それに、

俺はにこりと笑い、止めをさす。

「何で生きてる猿を連れてるのかなあ？」

言い終わると同時に猿と偽試験官にトランプが刺さった。

「……………せこせこめ」

ヒソカのトランプの餌食になつた一人と一匹を一瞥し、
俺は動き出した集団について行つた。

一次試験。その五

渥原に入り、俺はゴン達と別れ、一人で行動していた。

『だあああつ！お前達うぜえ！』

マチボッケとかジライタケとかサイミンチョウに行く手を阻まれること數十分。そろそろ我慢の限界らしい俺は手を高く振り上げた。

「つてえ――――！」

『おっさんの叫び声？…チツ、アイツか』

おっさんの叫び声が遠くで聞こえ振り上げた手を下ろし直ぐ様元来た道を走り出す。

『（何であいつは大人しくしてらんないんだ。面倒事増やすな死ね）

』

色々な苛立ちが混ざつて今にも爆発しそうな気持ちを必死に押さえ込み血の臭いが濃いところへ向かう。まあ、原作知ってるが、仕事だから、一応行こう。

「うん！君も合格。いいハンターになりなよ。一人で戻れるかい？」

「クリと頷いたゴンから離れたヒソカは何故か氣を失つてゐおつさんを肩に担いで姿を消した。俺は膝から崩れ落ちたゴンを遠くから一瞥しヒソカの後を追つた。

「…キミはいつまで尾けて来る気だい？」

『やつぱりバレてた？』

こちらを見ずに言われおつさんを肩に担ぎながら走るヒソカの横まで走る。ちらりとヒソカを盗み見ると機嫌がいいのかにこにこしている。

『俺の仕事増やすようなことあるなよ』

「だつてあまりにタルいんだもん。選考作業を手伝つてやるつと困つてね」

『受験者の中でお前と同等または上の奴なんて俺とあいつだけだる』

こいつの合否基準が全く理解出来ない。ゴンが合格なのはわかるが氣絶しておつさんを何故合格にしたのか少しだけ気になる。

『…つと、やつと着いた。んじゃ彼は預かってくよ』

一次試験会場らしき場所に着き俺達は足を止めた。ヒソカからおつ

さんを受け取り近くの太い木まで引き摺る。

「相変わらずだなあ、コキは。くへへ、そこが可愛いんだけどね」

舌なめずりをしてそんなことを言つていたなんでもうひん俺は知らない。

一次試験開始まで。その一

俺はレオリオが入る木の下で一次試験が始まるまで待っていた。

「ふう . . .

暇すぎる。することない。

さつきまでレオリオで遊んでいたのだが、いい加減あきて
ケータイをいじっていた。

ジンからの着信履歴が275件。
仕事の依頼が7件入っていた。

つーか、ジンどんだけかけたんだ。

俺が悩んでいると、手に持っていたケータイが震える。
誰かと思い見てみれば、案の定ジンだった。

「もしもし」

『つづキか？何度かけたんだぞ』

『試験中だつたんだよ、てかかけすぎだつづーの』

『しようがないだろ、心配だつたんだから』

『ふーん。じゃつ！』

『あつてめつ、切るな』

ジンが何か言つていたが、無視して切つた。

どうせ危ない奴は即ぼこれとかしかいわねーもん。

あるといふタイミングで「コン達が駆けてきた。

「ユキつよかつた、ちゃんと合格してたんだねー。」

「コン、君はさうまで変態と直面してたつて言つの。俺の心配までしてくれるなんて、なんていい子なんだ！」

「ああ、大丈夫だよ。というかレオリオがどうしたんだ？」

知つてゐるナビ（笑）

「やうなんだよ、俺も覚えてねえんだよな

「つまつー？」

絶対に寝てゐると思っていた俺は、下から聞こえた声に素つ頼狂な声を上げる。

「ユキ

「クラピカ、そんな田で見ないで」

憐みの田で見てくる、クラピカ。

そんな田で見られたつて、いたたまれないから。

「といづり、何で中に入つていのだ？」

「ああ、それは

入れないんだよ、そつとおさうとした俺をねらつ、銀髪美少年もといキルアが言つ。

「入れねえんだよ
「キルア！」

ゴンはキルアを見つけ、うれしそうだ。
一人で話し始めた一人を見ていたら、レオリオに話しかけられた。

「なんだ、羨ましいのか？」

いやにいやしながら言つたレオリオ。

「いや、若いっていいなと思つて
「ユキ。お前は幾つだ？」
「十六だけど」

言つた瞬間、四人が固まる。あ、タイムストップとかは使つてない。

「え・・何さ？」
「いや、13ぐらいだと思つてたから」
「ははは、俺3つも若返つてたか」

身長大分伸びたと思つたんだけどな
地味に悲しい。

そんなこんなしているうちに、12時になり、
ドアが開いた。

さあ、二次試験スタートだ。

一次試験。その一

重々しい扉が開くと脚を組んで椅子に座っている美人試験官のメンチとその後ろで腹を空かせためちゃくちゃ『デカい大男のブハラ』がいた。

『（あの獣が唸つてゐるよつた音つてあの人のお腹の鳴る音だつたのか…）』

じ一つとブハラさんを見るとまた背後から微かに殺氣を感じた。ちらりと見ればヒソカが2人に殺氣を放つていた。何をしているんだあの馬鹿は。

「どお？おなかは大分すいてきた？」

「聞いてのとおりも一ペコペコだよ」

「そんなわけで一次試験は料理よ！！美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意してちょうだい」

まずはブハラさんが指定する料理を作りそれに合格した人だけがメンチの指定した料理を作るというのが一次試験の内容。そんなブハラさんのメニューは「豚の丸焼き」だそうだ。

「森林公園に生息する豚なら種類は自由！それじゃ一次試験スタート！」

スタート開始の合図がされたと同時に受験者は一斉に森の中へと駆け出した。俺も森に向かおうと後ろを振り向けば少し離れたところでヒソカがにんまりと笑って手招きしてるのが目に入ってしまった。

『（見なきやよかつた。何であいつ俺の目に入る場所に立つてんだよ。）』

大きな溜め息をついて、ゴンとクラピカ、レオリオの元から静かに離れた。

「オレ達も早く行けりやせ……ってコキは？」

「あ、本當だ。でもキルアもいないし大丈夫じゃない？」

「レオリオは人の心配より自分の心配をした方がいいのではないか？」

「てめつ、ビリコウ意味だよー？」

「まあまあ……」

そんなこんなで、ゴン達も豚を捕獲するために会場を出た。

一次試験。その一

「……何で俺がお前の為に力使わないといけないんだよ』

「そのかわりボクがユキの分の豚も取つてきてあげたじゃないか』

「ぶつ叩いて豚2頭取つてくんのと豚2頭焼くのどっちが大変だと
思つてんだよ』

ぶつぶつ文句を言いつつヒソカが取つてきた2頭の豚をこんがりと
焼き上げる。

普段焼きにくしてばかりだから焦がさないように調節するのほん
難しいことがわかつた。

「ほー、出来上がり。さつと持つて行くぞ』

「ユキがいてくれて助かったよ』

「キモいこと言つな死ね』

いやいやしながら豚を受け取つたヒソカに舌打ちをして、ブハラさん
の元に向かつた。

* * * *

「うんおこしー。」れも「ー。」うん「うんイケル。」れも美味ー。」

「（豚の丸焼き70頭も食べられるなんて…あの人本当に人間か？）

L

豚の丸焼き料理審査！！71名が通過！！

ブハラさんの食いつぶりに誰もが啞然としているとメンチはドラを鳴らし試験終了の合図をした。

「あたしはブハラとちがつてカラ党よー！審査もキビシクいくわよー。二次試験後半、あたしのメニューはスシよー！」

「（スシか… 最近全く食べてないな）」

一次試験。その三

「…何ジロジロ見てんだよ」

「スシがどんなものか知つてそうな顔してゐるかい」

「修行時代に師匠と食べに行つた」とあるんだよ。言つとくハナビお前に教えるつもりはない」

頑張れよー、と手を振り一人静かに外に出る。スシよりも先に仕事をやがりなればいけない。

「サトシセーん、ちよつといい?」

「どうかしましたか?…そつこいえば、ユキさんは、ライセンスは持つていたのでは?」

「え、あれ?まさか会長に聞いてない……みたいだな。つたくあのクソジジイは…」

どうせ面白やうだとか面白だとで何も伝えてないんだろう。とな

ると他の試験官にも俺のことは伝わってないと考えた方がよさそうだ。

「実は俺依頼でここにいるんだ」

「依頼、ですか… 一体どんな?」

とりあえずサトツさんに依頼内容を大まかに伝え
紙切れを渡し後ることは任せてスシ作りの為魚を調達しに行こうと
一步前に足を踏み出したその刹那、

「魚ア…?」は森ん中だぜ…?」

「声がでかい…川とか池とかあるだろーが…!」

いやいやお前も十分声でかいから、と心中で突っ込みを入れながら
改めて魚の調達に向かった。

「…なんか嫌な予感しかしないんだけど」

一次試験。その四

「あら、あんたが一番なんて意外だわ」

「……もしかしてメンチ俺のこと忘れた?」

「は? あたしあんたに会ったことないわよ?」

「いやいやいや、あるから。普通に会ったことがあるから」

と言つが会つたことあるのは俺であつて俺じゃないから
知らなくて当然なんだけど(変装してるから)。

取り敢えずそれは置いといて俺は作ったスシをメンチに渡した。

「……タネは筋目に対し直角に切れてるし、シャリの握り具合も
いい。素人にはちやあ中々出来てるじゃない。109番合格よ。あ
んたはここに座つてなさい」

「うーーっす

「ーー今のもさか

こうつと笑つて少し声のトーンを高めるとメンチは氣付いたのか
田を見開いた。

「あんた… まさかコキ…？」

「おー、久しぶりだな。今まで『付いてくれなかつたら多分俺泣いてたぞ』

〔冗談だけど、と髪を口を開いたがメンチにいきなり抱き着かれた。〕

「「うおー? あ、メンチセーん? 苦しげから出来たら離れてほしけーなんて…」

危つて舌を噛むといつた。なんて思いながら首に巻かれた腕が締まり息苦しくなりメンチの背中を軽く叩く。

一次試験。その五

「全然連絡くれないから心配してたのよー。」

『「ゴメン」「ゴメン。仕事が忙しくてや』

「だからって何ヶ月も音信不通にならないでよ」

そんなこんなで暫くメンチの話を聞いていると自信あり気な顔をしたレオリオがスシを持って来た。

「出来たぜーーー！オレが完成第一号だーーー！」

「残念だけど第一号は彼よ。……って食えるかあつー。」

「（おおう、さすがにきつこよこはれは）」

それからスシと言えるようなものは出て来ずメンチの苛立ちは募つていくばかり。

そして先程から人の作ったやつに対する笑つてたハゲが持ってきた。

「ダメね、おいしくないわ！」

「な、なんだとーー!? メシを一口サイズの長方形に握つてその上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが！ こんなもん誰が作つたつて味に大差ねーべ！?」

「（口イツバカだ。完璧バカだ）なあブハラさん…」

「これはマズいね…」

すぐ隣でハゲを怒鳴りつけるメンチを見て俺達は大きな溜め息を吐く。

ハゲの所為でスシの作り方が受験者達にバレて次々とスシを持って来るが完全に頭に血が上った

メンチの審査はとても厳しく合格者は出ないまま、

「ワリ…おなかいっぱいになつちつた」

合格者 1名

一次試験。その六

「テスト生の中に料理法をたまたま知ってる奴がいてさー、そのバカハゲが他の連中に作り方をバラしちゃったのよ」

「合格者は1人だと審査委員会に電話しているメンチは相変わらずイライラしていく口調が荒々しい。」

「とにかくあたしの結論は変わらないわ！一次試験後半の料理審査合格者は272番一人よー！」

「まさか本当にこれで試験が終わりかよ」

「〔冗談じやねーぜ……！〕

「（その気持ちはわかるけど俺に殺氣を向けないでくれ）」

「ゴオオーンー！」

突如鳴り響いた音の方に顔を向ければ青筋を浮かべ殺氣立っている

デブがテーブルを叩き割っていた。

「納得いかねエな。とてもハイそうですか、と帰る気にはならねエな。つーかテメエその女に甘い言葉囁いて合格させてもらつたんじやねエのか！――？」

「……………」

「オレが目指しているのは「ツクでもグルメでもねエ！！ハンターだ！！しかも賞金首ハンター志望だぜ！！美食ハンター」」ときには否を決められたくないなー！」

俺を指差して甘い言葉だのと言つたテブは直ぐにメンチに向き直りとんでもないことを言い放つた。意味のわからないことを言われるし知り合いを悪く言われるしでとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「…黙つて聞いてりやグチグチうるせエんだよ。美食ハンターごときだア？ざけんじやねエよ。ハンターでもねエデブがシングルの称号を持つメンチを侮辱するな。それに自分が合格出来なかつたからつて俺に当たつてんじやねエよ。ハンターになるなら凡ゆる知識身に付けとけクソデブ。しかも何キッチン破壊してんだよ。食べ物無駄にすんな。」

「テ、テメエ…ぶつ殺してやらア…！」

先程の言葉が気に入らなかつたらしいテヅは俺目掛けて殴り掛かつて來た。

「強気な奴は嫌いじゃない。だけど、」

ドカッ！…！

「お前みたいな奴は嫌いだ」

拳を躲して人差し指で額を弾けばテヅは勢い良く飛んでいき壁を突き破つて外までふつ飛んでいった。

「（速い…オレでも全く見えなかつた！）」

「はは、あんな大口叩いてたクセにザマアねエなア？次俺の知り合い侮辱したら殺す」

聞こえてるわけないんだけど。

デブ同様殴り掛かろうとしていた奴等に止めておく。

苛立ちを抑えるようにテーブルに置いてあるお茶を飲む
それでもいりつきがおそれなかつた俺は「コップを片手で握りつぶ
す。

受験者の顔が青くなる。

メンチにギロリと睨まれた。

「余計なマネしないでよ」

「だつて試験官が受験者に手に出したらマズくないか？殺る気満々
じゃん」

「ふん、まーね。賞金首ハンター？笑わせるわ！たかが『テロペン』一
発でのされちやつて」

メンチは立ち上がり後ろ手に隠していたかなり長い包丁をクルクル
と数回まわしてから
宙に投げそれを片手で取る。

「ハンターたる者誰だつて武術の心得があつて当然！！武芸なんて
ハンターやつてたらいやでも身につくのよーあたしが知りたいのは
未知のものに挑戦する気概なのよーーー！」

「それにしても合格者一人とまじめにやせんか？」

突然上空から声が聞こえ受験者達は慌てて外に出る。
そして上を見上げるとハンター協会のマークがある飛行船が飛んでいた。

「（会長直々にメンチを説得に来るとは……一体何考えてんだ？）」

遙か上空から躊躇いもなく飛び降りて来たかなり年をとったじいさんの足は向ともないらしい。

「（何者だこのジイサン）」

「（じゆーか雪せー？今ので足の雪せー？）」

ざわめく受験者達にメンチが

「審査委員会のネドロ会長ハンター試験の最高責任者よ」と告げた

瞬間、受験者達は緊張で固まる。

「ま、責任者といつてもしょせん裏方。

こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゅ（チチでけーな）」

「（今変なこと考えただろ）のロジジー」

俺は分かったが、緊張しているメンチは会長が何を思ったのかは分からなかつたようだ。

試験の合否について問われたメンチは審査員を降りると言つたが、実演参加するという形で再試験が行われることに纏まつた。

再一 次試験。その一

そして飛行船に乗つて着いた場所はマフタツ山。下を覗けば流れが早い川が流れている。

「安心して下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど。
それじゃお先に」

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りに行つたのじゃよ。クモワシは陸の獣から卵を守るために谷の間に丈夫な糸を張り卵をつるしておぐ。その糸につまくつかまつ一つだけ卵をとり石壁をよじ登つて戻つてくる」

受験者達は俺と同じように谷底を覗いた。
予想以上の激流に立ち竦む者も少なくない。クモワシの卵を取つたメンチは攀じ登つて上がつて来た。

「Uの卵でゆで卵を作るのよ」

「（……簡単に言つてくれるぜ。こんなもんマトモな神経で飛び出
りれるかよーー。）

「あーよかつた

「——ゆーのを待つてたんだよね！！」

「走るのやら民族料理よりよっぽど早くてわかりやすいぜ」

谷底を覗いて顔を青くさせたテグの隣でゴン達は躊躇いなく谷底に飛び降りていった。

それに続いて他の受験者達も飛び降りていく。

けれど後ろを振り返ってみればまだ何十人も受験者達は残っている
恐らく、というか確実にここでキブアップだろう。

「残りは？ギブアップ？」

「やめの も勇氣じや。 テストは今年だけじやないから」

「（あの日から、俺の志願は美食ハンターだ！、とかいつちやつて
ー）」

俺はそんなことを、ゴンに卵をもらは、メンチに言いくるめられた

デブを見ながら
思っていた。

三次試験まで もの

「残った43名の諸君にあらためてあいさつこといつかの。わしが今回のハンター試験審査委員会代表最高責任者のネテロである。

本来ならば最終試験で登場する予定であつたがいつたとこいつして現場に来てみると
なんともいえぬ緊張感が伝わってきてこゝもんじゅ。
せつからくだからこゝのまま同行させてもらひうことある「

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。

こちから連絡するまで各自自由に時間をお使い下さー」

会長とマーメンが部屋から出て行くと緊張の糸が解けた受験者達は
目的地に到着するまで各自自由に時間を潰し始めた。
クラピカとレオリオは疲れたらしく周りに気を配りながらも各自眠
を取っている。

そんな中ゴンとキルアは飛行船の中を探検しに行つた。（誘われた
けど一重にお断りした）

ネテロ師匠のボールを取るのは俺も一年かかった。もうこりこりだ。

「ねエ、今年は何人くらい残るかな？」

「合格者つてこと?」

「そ、なかなかのツブぞろいだと思うのよね。一度ユキ以外落としこいつ言うのもなんだけど。サトツさんども?」

「ふむ、そうですね…新人がいいですね。今年は」

あ、やっぱリー！？とテンションが上がっているメンチを横目にテーブルに並べられた料理を口に入れる。流石ハンター協会だ料理が美味い。

「ユキノはどう？」

「俺は405番と99番がいいと思つ。後はあのハゲもいいんじゃないか？ブハラさんは？」

「そうだねー、新人じゃないけど気になつたのがやっぱ44番…かな。

メンチも気づいてたと思うけど255番の人気がキレ出した時一番殺

「氣放つてたの実はあの44番なんだよね

「デブがキレて俺が『ハッピング』したときは今にもうすでに向かって
来そうなほど殺氣立っていたのはヒソカだった。

「抑え切れないって感じのすごい殺氣だったわ。
でもブハラ知ってる？あいつ最初からああだったわよ、
あたしらが姿見せた時からずーっと。あたしがピリピリしてたのも
実はそのせい。
あいつずーーーとあたしにケンカ売つてたんだもん」

「それサトツさんのもそりだつたよな。
ここにいる全員強いから問題ないだろ？けどあいつは快楽殺人中毒
者だから気をつけた方がいい」

「ええ、そうですね。彼は我々がブレーキをかけるといひでためら
いなくアクセルを
踏み込むような異端児のようですからね」

「（異端児か…）」

その言葉を頭の中で繰り返しながら最後の一 口を口の中へ放り込む

「「」馳走様でした。一応受験者だし試験内容聞くわけにもいかないからそろそろ戻るよ」

メンチが何やら言っているが気にせず部屋を出る。

男ばかりのむさ苦しい部屋にいたくないので夜景が見える窓の側にあつた長椅子に座った。

「いい加減出て来い」

「よく気付いたねユキ」

「当たり前。てかイルミ……ああ、ギタラクルだっけか」

顔面に無数の鉗を刺しているギタラクルは音もなく俺の隣に座った。

「キルアって銀髪の奴お前の弟だつたよな? なあにー? もしかして弟君が心配になつて来ちゃつた?」

にやにやしながらからからかうように言えればギタラクルはびくつと反応した。

もちろん俺にしか分からないくらいのものだが。

・・・原作知識ありつて便利だなあ

「そんなわけないだろ。次の仕事上必要なだけ。コキは？」

「なーんだつまんないの。俺はちょっと…仕事？」

「…訊いてるの俺なんだけど」

「細かいこと気にする男はモテないぞ。…あ、そーいえば久しぶりだなー元気だつた？」

「（今更…?）」

「イル!!!」

「……見ればわかるでしょ」

「顔面に鉛ぶつ刺してる無表情野郎のどこのどつ見ればわかるんだよ」

…

長い付き合いでし元気だと云ふことはわかるけど。

「（イル!!!）と云ふと落ち着く。やっぱり好きだな」

今頃キルアとゴンは師匠とボール遊びしてんだろうな。

「 . . . 」

キルアの暗殺術見てみたい気がする。

三次試験まで もの

「あれ、『キビリコベの』

「ちよつと探検してみへる」

やつぱりこへもたつてもこられなくなつた俺は、イルミと別れて
ゴン達のところに行へことにした。

「迷子にならないでね」

「イルミは俺をこへつだと思ひで？」

あれから十分後。

「嘘嘘嘘ついで……」

見事に迷子になりました。

引き返そうとしても、どつちから来たか分からず。

．．．ん？念を使えばいいだつて？

その時の俺はパ一くつで、そんな発想もできなかつたよ。

「はあ～～じよ・・・・・」

「何がだい？」

鳥肌が立つような、薄気味悪い声（全国のヒソカファンの方すみません）
が、背後からする。

・・・思わず悲鳴を上げた俺は悪くないと黙り。

「俺の背後に立つな

「じゃあ、前ならしいのかい？」

「訂正だ。俺に近寄るな」

「それは無理だね」

そつこいつと変態は俺に一歩一歩近づいてくる。

俺はヒソカとの距離を縮めないよう、一歩一歩下がっていたが。

そんなやり取りが、結局全力疾走となり、俺とヒソカが到着の知らせがあるまで、リアル鬼ごっこしていたのは言わざと知れたことだらう。

三次試験まで もの（後書き）

ここまで読んでくださつてありがとうございます。
レビュー、感想などどんどん書いてください。
中傷、荒らし以外なら、何でも受け付けています。

三次試験。その一

翌日、予定時間の8時を少し過ぎた頃無事三次試験会場であるトリックタワーと呼ばれる塔の頂上に到着した。

「（二）が三次試験のスタート地点になります。
さて試験内容ですが試験官の伝言です。「制限時間72時間以内に
生きて下まで降りてくること」
だそうです。それではスタートーー！頑張って下さいね」

スタートの合図をするとマーメンは飛行船に乗り込み飛んで行った。

どうやら外壁を伝い降りて行くのは無理らしい。

怪鳥に喰われている86番から視線を戻すと40人くらいの受験者がいつの間にか

半分近くいなくなっていた。

「（そこで扉見付けたんだけビヨキも一緒に行かない？

「（かなり人数減ったな…）（こにいれば死ぬことはないだろ）し俺

も行くか）うん、そうするわ

ゴン達に元に向かおうと振り返り歩き出した…はずだった。

「ウチハ...?」

右足を踏み出し左足も前へ出そうとしたがガクリと身体が傾いた。下を見れば足元に隠し扉があつたらしく反応する間もなく穴の中へと落下して行つた。

「あんなマヌケな声出すとか恥だ……！」

「…」と云ふよつて「…」ことに対応出来なかつた」との方が恥だ…。つー…。

「おーおーこの落下速度と高さは絶対死ぬだろ。

「これ念使いか身体能力すば抜けてないとやばいって！誰だよこんなもの考えた試験官は！」

文句を言いつつ足にオーラを集め怪我ひとつある」となく着地する。

「（足地味に痛い…能力者じゃなかつたら死んでたな。
あ、一人死んでるし。うつわ色々飛び散つててグロ）」

血の臭いがした方に顔を向けると着地に失敗したであらう人間が死
んでいた。

死体は見慣れてるけど田玉が飛びだし顔面ぐつちゃぐつちゃでぶつち
やけ気持ち悪い。

コシンと身体を足で蹴つて台の上に置いてある手錠を手に取つた。

「これをどうしようってんだ？」

その道は試練の道。君達にはいくつかの試練を受けてもらつ。そ
こに置いてある手錠をつけ時間内に全ての試練をクリア出来れば合
格だ。ただし手錠が外れたり切れたりしたら失格だ。それでは健闘
を祈る！！

「だそりだけど？」

三次試験官から説明を聞き終わり陰に隠れ気配を消していた

奴の方に声を掛けるとそいつは静かに姿を現した。

「…まさかお前と協力することになるとは思わなかつたぜ」

「（ああ、あんときのバカハゲか）」

「俺はユキノだ。足引っ張るなよ」

「オレはハンゾーだ！ここだけの話だけじよ、オレ忍者なんだよ。幻の巻物 隠者の書 を探……お、おい話はまだ…！」

「もう試験は始まつてゐるんだ。お前の話に付き合つてゐる暇はない。どうしても話聞いてほしいなら歩きながらにしろハゲゾー」

俺の右手とハゲゾーの左手に手錠を掛け顔を上げるとハゲゾーは落ち込んでいた。

あれがメンチに鬼のような形相で捲し立てられたときハゲハゲ言わ
れて
トラウマにでもなつたのか。…まあそんなこと俺の知つたことじや
ないが。

扉が開き手錠に72時間で止まっていた時間が0に向かってカウントを始めた。

「よつし、せつせつと行……うおわあつ……？」

落ち込んでいたハゲゾーは扉が開いたと同時に何かを振り払つかのように走り出した……のは良かった。

「ちょ、テメ…何へマしてんだハゲ！！初つ端から足引っ張つてんna!!!!」

「わ…悪い…けど実際は足じやなくて手首引っ張つてんだけどな…」

「んな」とびつでもいいんだよ…ふざけてんのか！」

扉の先に床がなくハゲゾーは落ちた。別にハゲゾーが落ちようと構わない。

構わないが今俺達は手錠で繋がれてるわけで必然的に俺もその穴に落ちることになった。

三次試験。その一

咄嗟に左腕を伸ばし突起物を掴んで落ちることはなかつたが、流石の俺も片腕だけで野郎一人を支えるのは正直辛い。

「おいハゲ！お前どうにかしろー忍者なんだからどうにかしろー。」

「忍者…よつしゃ、任せろー。」

忍者と呼ばれたことが嬉しかったのかハゲゾーは壁を蹴り俺を抱え高く飛び上がり取り敢えず向こう側に無事に渡れた。

「わざと落ちてみたんだが…」

「おーそつかそつかお前はそんなに俺に殺されたいのか。ん？」

「じょっ、冗談に決まってるだろーよつしゃと次進もうぜー。」

「ひひりと笑つてゐるがユキノの目は笑つてない。

「マイシの44番と回り歩いて……いや、それ以上にヤバイ。

「ロロロ…

「……」

一次試験で255番をトペンド吹っ飛ばしたときも今もオレですら身体が震える殺氣…。
タダモソジヤねーな。

「ロロロ…

「おーい、聞いてるかー？」

「つーな、なんだ？」

「な、なんだ？じゃない。後ろ見ろ、うしろ

「ローローローローロー……！」

「後ろ……。つーこれヤバくねーか？」

「ヤバいな。このスピードだとあと数秒で俺達あのトゲ付き大玉に串刺しだな」

狭い下り坂を物凄い速さで走っているが回転の掛かっている刺付き大玉はどんどん加速していく。普段なら硬で粉々にするか纏か堅でガードするんだけどハゲゾーがいるからそれは出来ない。

「ローローローローロー……！」

「（やるやる本氣でやばいな）よし、決めた。悪いなハゲゾー」

「あ？ つーかオレはハゲ……つー？」

「少し寝ててもいい……つて寝かせてから言つもんじやないか」

右手が拘束されてるからとてもやりにくかったが何とか左手でハゲゾーの首に手刀を落とし直ぐ様肩に担いで後ろを向く。

そして思いの外近くまで来ていた大玉に向かつて息を吹き掛けた。すると異常なほど冷たい冷気が辺りを包み込み一瞬にして凍り付いた。

凍っている大玉に軽く触れば澄んだ音が響き粉々に砕け散った。キラキラと光るそれから視線を外し足元に移す。

「我ながら上出来だ」

しかし右も左も上も下も凍り付きマイナスの世界になつたここにこれ以上長居すれば気絶したハゲゾーは永久に目を覚まさなくなるだろう。

それでも俺は別に構わないが、今回はそうもいかない。

俺は仕方なく肩に担ぎ直し少し先にある扉まで歩みを進めた。

ハゲゾーを抱えているというハンデがあるにも関わらず

俺は順調に試練をクリアしていった。何度も捨てて行こうと思つた

けど。

「おー、やつと最後の扉！」

ここに辿り着くまで色々なことがあり右肩が痛いし物凄く疲れた。
ただ気を失っている奴が合格するのは気に入らないが手刀を落としたのは
俺だし諦めて勢い良く目の前の扉を開けた。

「最後の扉へよ！」そ。今からここにいる全員と戦つてもう！」
「戦い方は自由。その手錠を外しさえしなければ何をしても失格にはならない」

代表らしい囚人一人が一步前に出て説明をする。

手錠を外さなければ何をしてもいいだなんてこんな簡単でいいのだ
らうか。

「つまりお前達を殺しても構わないってことだな？」

俺は少し挑発するよ！」

「オレ達を殺す？綺麗な顔して面白え！」と言つじやねーか

「ここにいる奴全員は終身刑の凶悪犯罪者だぜえ？」

「兄ちゃんこそ死にたくなかつたら今の内にギブする」とだな！」

ざつと見て150人くらい集まつてゐる囚人達は俺の発言にグラグラ笑い出し一気に騒ぎ出す。

「（地味にムカつくなあ、オイ）」

俺は大きな溜め息をついてハゲゾーを肩に背負いなおす。

「それじゃ始めようか」

腰を低く落とし、構える。

…俺は口端を妖しく吊り上げ試合開始を促した。

三次試験。その三

俺の足元には、さつきまでの囚人たちが倒れていた。
開始と同時に手刀を首元に落とし、気絶させた。

それは、一瞬の出来事。

俺が誰にも劣らないと言えるもの。

それは『スピード』。

嵐、台風、むしろ竜巻が通りすぎたあとのようにだった。

君は、あの『紅い閃光』かい？

スピーカーから声がした。

何て名前だったかな。ポッキー？

「まあ、そう呼ばれてた時もあったかな。あ、ポッキーさん。

俺もう合格？」

リップーだ。109番、294番合格！所有時間9時間37分！

その声とともに、重苦しい扉が開き、俺はそこに足を踏み入れた。

四次試験まで もの

「おや、早かつたじゃないかコキ」

ズザザザザッ！

突然真横からした声に反射的に距離をとる

「そんなに過剰反応しなくてもいいじゃないかツレナイねえ」

「やかましい変態」

忘れてた…、三次試験通過第一弾ヒソカだつた…

指でコメカミを押さえながら俺はニヤニヤしてこのヒロ口を睨む

「くく…、いいねその田舎者とつてもやそられたるよ」

ゾクウツ！

凄まじい悪寒を感じた俺は反射的に距離をとる。

「ユキはイルミと知り合いだつたのかい？」

ヒソカはトランプを捌きながらいきなり俺に尋ねる

「なんだよ、知り合いだつたら悪いのかよ」

「くくくく…、しかも結構長い付き合いだつて？」

に、逃げ切れない……しかも若干殺氣が……

目を泳がせながら、じまかしているといいタイミングでイルミが入つてきた。

素顔で入ってきたイルミの腰に抱きつく。

……ほぼ、タックルだが。

「イルミ会つたかった……！」

俺が泣き声を出すと、イルは心配したようにヒソカに殺氣を向ける。

「ヒソカ、青い果実見つけたんだが。そっちにようかいかけてなよ」

「いついつイールは針に手をかける

「青い果実は実のを待っているんだよコキは既に熟しているし、色んな意味で美味しいだしね」

ヒソカは舌なめずりをしてトランプを構える。

「ワオ、お互に殺る気満々？」

俺は一人から距離を取りつつ傍観を決め込む。

するとヒソカは肩を竦めてトランプをしまった。

「いいでキミと殺り合のは後々面倒そうだからやめておへよコキは諦めないケドね」

「いついつヒソカは壁に寄り掛かつて座った

それを見たイルミも殺氣を消して針をしまつ

「…コキ、大丈夫とは思つけどヒソカ変態だから絶対氣を許したら
だめだよ」

そう言い残してイルミも壁ぎわに歩いていく

「…氣なんか許すわけないじゃん、貞操が掛かってるのに」

俺はため息を一つついて一人とは反対側の壁ぎわに腰掛ける。

ゴン達はラスト一分まで来ないから、それまで寝よう。

昨日は十分疲れなかつたし。

俺は瞳を閉じて、ヒソカ対策に念のため円を広場中に張る。

「ヒソカ、俺が寝てる内に近づいたら殺るからな」

一応そつ釘を刺して俺は「破壊方式」（俺の愛刀）を握り締めた状態で眠りに落ちる。

向こう側から聞こえてきた「残念」とか「言葉は空耳」とつことしておこた。

四次試験。その一

「残り一分です」

アナウンスを聞いて俺は眼を開ける

「… わすがに丸3日も寝るとかえってキツイなあ」

「キツ」と首を鳴らして立ち上がる

それと同時に前方にあつた出口が音をたてて開いた

「あー、ユキも通過してたんだね！」

扉から出でてきたゴンが俺に気付いて駆け寄つてくる

「うん、俺のルートは楽なヤツだったから。ゴン達はボロボロだね」

時間一杯まで色々な罠に追って回されたんだよな？

服の汚れを軽く叩いてあげながら俺はみんなを見渡す

「コッチは仲間割れとかあってかなり面倒だったんだぜ」

「モーだぜ、まあユキがコッチに来てたらこんなに苦労はしなかつただろ？ ケドよ」

レオリオはそういつて背後のトンパを睨み付けた

あ～、そういえばいたなあ、こんなヒト

「ふうん、まあいいじゃん結果的にはみんな通過できたんだしゃ」

こんなヤル氣ないヒト相手にするだけ無駄だし。

レオリオは「そりゃそーだけど…」とブツブツ言つてゐるナビゲーター
「うへ。

塔の外に出るとなんかやらしい田付きの
パイナップルさん（リップー……だよな）が立っていた

「諸君タワー脱出おめでとう。残る試験は四次試験と最終試験のみ」

あと二つか……長かったよつた短かつたよつた……

「これからクジを引いてもらひ。」のクジで決定するのは狩る者と狩られる者

タワー脱出順にクジを引くよつ言われ、ヒソカの次に俺はカードを引く。

198番……つてハゲゾーが間違えてゲットするヤツだ。

よし、キルアが倒したところを漁夫の利といひ。

四次試験対策を立てながら俺はみんながクジを引いていくのを眺めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478y/>

狩人物語

2011年11月23日13時48分発行